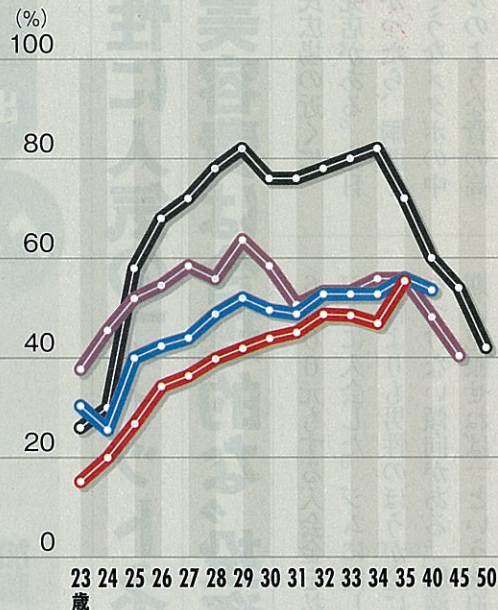
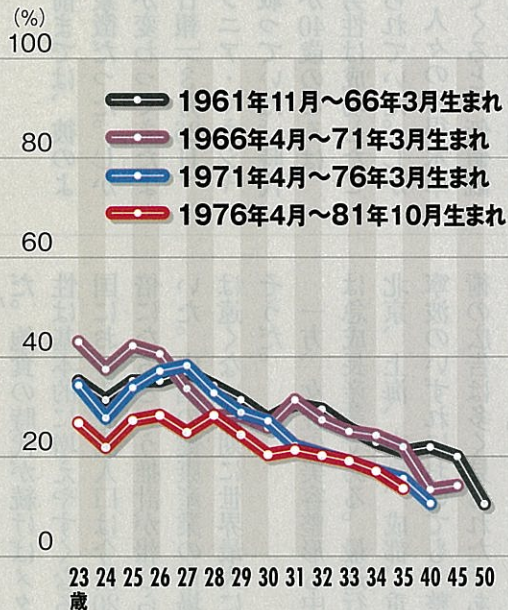


女性は大卒時に正社員になれないとなれないまま

男性の生年別
各年齢時正規従業員比率



女性の生年別
各年齢時正規従業員比率



若年層非正規雇用の正規への 転換減少で過少年金の懸念

日本ではバブル崩壊後、企業は生き残りを懸け人件費を削減してきた。正規従業員採用を絞り込む一方、非正規従業員への大幅な切り替え、年功序列賃金の昇給カーブを平らにすること、生産拠点の一部海外移転などを断行した。

その結果、最近では給与所得者の4割近くが非正規従業員となっている。若者も例外ではない。高校や大学を卒業した直後の初職が非正規であったり、転職などで25歳までに非正規の経験を有しているたりする人が30〜34歳層では男性で3割強、女性では4割に達する。25歳までに非正規経験がある人が、正規従業員に変わる比率を見ると、日本では男女間格差が大きい(グラフ参照)。男性の場合、正規転換者比率はかつて約8割であったが、最近では5割強にとどまっている。正規への転換は30歳前までが大半であり、35歳超では、まず無理である。

(財)年金シニアプラン総合研究機構
研究主幹、一橋大学特任教授

高山憲之

Noriyuki Takayama



左右される度合いが比較的大きいものの、家庭要因(両親の夫婦仲がよくなかったなど)や本人の資質(最終学歴や社会力など)にも関連している。さらに非正規から正規への転換は、同じ職場で2年以上継続雇用された経験を有しているかなどに大きく依存している。

バ

ツドスタート組は正規に全くならない、または正規としての雇用期間が短いまま、年金受給者となる人が多い。このグループの場合、厚生年金加入期間が25年未満で年金受給者となる比率が、将来、男性は5割強、女性は9割強になる見込みだ。その場合の老齢年金月額は平均で男性が約9万円、女性は約8万円にすぎない(25年以上では、それぞれ約18万円、約14万円)。人生もバッドフィニッシュとなる恐れが強い。

最近の若者は、お年寄りを支える前に、自らの雇用を失ったり、非正規のまま生活苦にあえぐことが少なくない。親の世代よりも豊かになれないと思っている若者が6割もいる。日本という国の骨格が従来とは全く変わってしまった。このような状況を放置していいのだろうか。